

# 専大スポーツ

No. 365

大会結果 予定は体育会ホームページ(専大ホームページ「スポーツ」からアクセス)を確認ください  
専大スポーツ編集部 web(http://sensuppo.web.fc2.com/) 大会結果を配信しています

# 黒田投手 日米通算200勝



専大を卒業しプロ20年目、地道に積み重ねた魂の投球で金文字塔を打ち立てた。プロ野球広島東洋カープの黒田博樹投手(平9商)が7月23日、日米通算200勝を達成した。東都大学リーグからプロ野球、そして大リーグへ、努力し続けた野球人生。学生時代の恩師や後輩が球史と専大の歴史に残る偉業を祝福した。

## 専修大学の皆さんへ

広島東洋カープ 黒田博樹です。

専修大学の多くの校友、教職員、学生の皆さんにご声援いただき、日米通算200勝達成の報告することができ、今は「ホッ」としています。

自分自身ここまでやれるとは思いませんでしたが、専修大学で過ごした貴重な4年間で僕を大きく成長させてくれました。

これからはチームの優勝に向けて一丸となって戦ってまいりますので応援よろしくお願いします。

日米通算200勝を達成、記念の花輪を掲げ、声援しこたえる黒田投手。7月23日、マツダスタジアム  
ドラフト会議後、仲間が胸上げて祝福。96年11月



## 専大で開花「東都最速」

「昔のことを考える」とは。大学、広島と投げたもので、まさかここまでやる。続けて成長した。たいし

「もともと素材はよか

たものだ」と語るのは大

学時代の監督、望月教

治さん。

黒田投手は高校時代、3番手の控え投手だった。元プロ野球選手の父の勧めで進学した専修大学も当時は東都大学リーグで151キをマークし、「東都最速」として一躍プロから注目を集めるようになる。

「今回、専大で開花した。目立つ選手ではなかったが、まじめで黙々と練習していた。1部に昇格し、強豪と対戦することで自信を深めたのではないかと望月さんは振り返る。

この年から大学野球でもスピードガンが導入された。黒田投手は春季リーグで151キをマークし、「東都最速」として一躍プロから注目を集めるようになる。

広島との入団契約時には「三振のとれる投手になりたい」と抱負を語っている。

大学時代ピッチングコースを務めた本学庶務課の見形仁一さんは「球は速いがコントロールが定まらなかったのが、3年次の秋ごろから頭角を現した。本人も努力家だったし、チームメイトにも恵まれたことで、黒田が生きてきた」と語り、愛弟子の活躍に「素晴らしい、専大の宝」と最大の賛辞を贈った。

大きく成長させてくれた。08年に米大リーグ・ドジャースに移籍。12年からヤンキース。大リーグで計79勝を挙げた。15年、広島に復帰。プロ20年目の今年、快挙を成し遂げた。

カープカラーで真っ赤に染まったスタジアム。球史に残る金文字塔を打ち立てた黒田投手を大観衆が祝福した。

黒田投手は「1勝する大変さは身に染みて感じているし、本当に200勝も勝ったのかなという気持ちで投げた」と語る。

「今回の偉業達成は専修大学の歴史に新たなページを刻み、後輩である私たちのみならず日本中に勇気、感動を与えてくれた。日米での活躍は私たちに、将来の飛躍の可能性や挑戦する心を教えてくれた」と野球部の森山恵佑主将(商4・星稜高)。「黒田投手の勇気がふれる1球は野球人の記憶に残り続ける。黒田先輩の更なる記録更新と、日本球界発展に貢献されることを願っています」と語る。

マネジャーの市川幹人さん(経営4・藤枝明誠高)は「黒田投手の活躍を報告。黒田投手の活躍を報告。黒田投手の名前も注目されたので、秋季リーグに向けて頑張り」と気合を入れている。

「チームの精神的柱でもある黒田投手の活躍もあり、広島は25年ぶりのリーグ優勝に向けて首位をひた走る。」



## 男子が準優勝

全日本大学総合卓球選手権・団体の部。7月7～9日、島津アリーナ京都

男子が昨年の5位から順位を上げ、準優勝となった。今大会はシングルス4試合、ダブルス1試合が行われ、3勝したチームが勝ちとなる。予選リーグを1セットも落とさず連勝で突破した専大は、決勝トーナメントでも日体大、関西学院大、中大と強豪を連破。準決勝で筑波大と対戦した。1番手は好調の郡山北斗(経営2・関西高)が務めたが、この試合では苦戦を強いられ、1-2とリードを許してしまふ。しかしここから怒涛の追い上げを見せた。強気のドライブで第4セットはわずか3ポイントに抑えて圧勝。最終セットもきっちりものにし、チームに1勝をもたらすと、続く選手も連勝し、筑波大をストレートで破った。

決勝の相手は、今春の関東学生リーグ戦の覇者であり最大のライバルでもある明大。1番手・郡山の相手は、リオ五輪代表の丹羽孝希。勢いに乗る郡山は第1セットを奪ったが、そこからお互いに一歩も引かず、最終セットへ。迎えた第5セットは郡山が9-7とリード。日本代表を追い詰める展開に、会場に大きな歓声と拍手が湧き起こった。しかし逆転を許し、9-11で敗れた。その後、田添健汰(商3・希望が丘高)、及川瑞基(商1・青森山田高)がシングルスで2勝を挙げ、優勝まであと1勝と迫ったが、2-3で惜敗した。連覇が期待された女子は準決勝で強豪の淑徳大に3-0で勝利したものの準決勝で今大会を制した早大に敗れ、ベスト4に終わった。(木村健人・商3)

準優勝に貢献した郡山(決勝) 撮影・富樫幸恵(文2)